

学生が参加できる団体続々！

# 注目すべき 新たな教育の胎動

子どもを取り巻く環境が変化し、子ども自身も変化を余儀なくされる時代にあつて子どもを育み支える「教育」「保育」「矯正教育」といった分野も変わり続けています。学生や社会を巻き込んで画期的なチャレンジをスタートさせた4つの団体を紹介します。

取材文／荒尾貴正（本誌編集デスク）

01

## 教育困難地域への教師派遣

＞ Teach For Japan

アメリカにTeach For America（以下TFA）という教育NPOがある。教育困難地域の学校に、全米トップクラスの大学を出た熱意ある若者を教師として2年間派遣するプログラムを90年から開始。子どもの学力を向上させるとともに参加教師はリーダーシップを習得でき、現在5100人を派遣している。これまでの成果が高く評価され、10年全米文系大學生就職希望ランキングでは、何とGoogle、Appleなどを抑えて1位を獲得した。この活動がTeach For

Japan（以下TFJ）として、日本でも展開されることになった。

TFJAはアメリカの教育に3つのインパクトを与えているという。1つは、教師が派遣された地域の子どもの学力が実際に上がったこと。2つめは、教師派遣を経験した若者が教育現場に残るケースが多いこと。派遣前のアンケートでは、派遣後に教育の世界に残ると回答するのは6%程度。しかし実際には、66%がその後も携わり続けている。3つめは、残り34%は教育界を離れるものの、「アメリカの教育課題を強

く意識した」リーダーとして各界に散らばっていくことだ。

**社会を大きく巻き込んで  
教育を変える新たな手法**

08年、ハーバード教育大学院留学中にTFJAの存在を知り、日本での展開を決定した松田悠介氏（TFJ代表）は次のように語る。「アメリカの教育格差の解決は、20年前は『絶対に不可能』と言われていました。しかしTFJAがそこに風穴を開け、『解決できるかもしれない』という空気になり、その方策を社会が真剣に議論するまでになりました。これは大きな進歩です。日本にも経済格差による教育格差の問題



学習支援事業では成長意欲が高く、情熱ある人材を学校に送り込んだり、地域で学習支援を行う。教師・講師は子どもの問題を解決するなかでリーダーシップが養われる

があり、十分な教育を受けられない子どもが数多くいます。そして、教育について『問題意識』はあっても、『当事者意識』のある大人が少なすぎるように思っています。この状況を打開することを目指してTFJをスタートします」

TFJの活動は大きく2つある。ひとつは教師派遣事業で、正規教員・臨時的任用教員や非常勤講師を全国の困難校に2年間派遣する。家庭環境が厳しく学習進度が遅れている子ども

を指導するうえで必要な研修を事前に行い、厳しい地域に優先的に送り込まれる。13年度から本格稼働の予定で現在各地の教育委員会と調整中だ。

もうひとつは、学習支援事業。生活

保護受給世帯の子どもや東日本大震災で被災した子どもたちを対象に、土日や平日夜間に公民館や学校の教室を使って勉強をみる。こちらはすでに開始しており、子どもや教育委員会の

反応はすこぶるいいという。昨年東京北区で実施した事業は、北区全体の改革事業のうちベスト1の評価を得た。昨年はTFJ全体で21プログラムを展開、300人の学生などが参加。日

本もアメリカと同様、トップクラスの大学の学生が参加している。今年は54プログラムを展開する予定。TFJを日本の就職ランキングで1位にすることが当面の目標だという。

## 02

### 数学で日本の未来を創造

▼わかりMATH

09年、東京大学の学生と卒業生を中心とした人たちの手により「わかりMATH」という高校数学教育サイトが立ち上がった。発案者の吉川淳史氏

は不公平だし、数学が苦手なだけで進路選択が狭まるのは社会的な損失でもあると思ったのです」

#### 数学嫌いの悪循環を断ち

#### 数学力の底上げで社会に貢献

のきっかけを次のように語る。「私は中学・高校時代に数学の先生に恵まれ、数学がどんどん好きになり、得意になりました。ところが別の先生のクラスでは、みんな『全然わからない』と言っている。先生によってこんなに差が出るの

そうして開設されたサイト「わかりMATH」は数学が苦手な高校生にもわかるように、アニメーションや辞書ページを多用して高校数学を解説している

（現在は数ⅠAの途中まで）。閲覧は誰でも可能で、無料登録すればスタッフに質問もできる。また現在、小学生が算数のどこでつまづいたのかを発見する「みつけMATH」というシステムも開発中。学校や塾での指導を支援する仕組みとして実用化を目指している。さらに、「つたえMATH」という数学に特化したキャリア教育事業も展開中。数学の日（3/14）に数学イベントを企画したり、社会人を対象に数学がいかにビジネスや日常生活に役立つのか講演も行っている。今後は中学校や高校などでも行っていく予定なので、講演を希望する学校があれば、ぜひ問い

合わせていただきたい。「社会人になって2次関数や3次関数を使う人は少ないかもしれませんが、そういうものを解くことで培われる論理的思考力や数字リテラシーは、どんな人にも必要ではないでしょうか。だからあきらめずに数学に取り組んでいただきたいですね」（吉川社長）



数学解説サイト「わかりMATH」。数学が苦手な人のために、考え方や途中式を省略せずに高校数学を解説している

## 03

### 学生の子育てインターン

▼スリール

「子育てのサポート」をしてほしい家庭と、「働くこと」「家庭を築くこと」について学びたい学生とをつなげるインターンシップ。

「ワーク&ライフ・インターン」という名のこの活動をスリール株式会社が10年にスタートした。具体的には、子育て中の共働き家庭を2人の学生が担当。

決まった日に保育所に子どものお迎えに行ったり、家で遊んだり、一緒にごはんを作ったり、保護者が帰宅したらバトンタッチ。週1〜2回のインターンを3カ月間続ける。

学生はほとんどは保育経験がなく、保育士を目指しているわけでもない。将来、仕事もしたい子どもも欲しいという学生が、働き方（ワーク）と人生（ライフ）を学ぶ「キャリア教育」といえる。現在約100人の学生が自ら登録し、その9割は女性だ。

文教大学4年生の石川麻波さんは、このインターンを体験して自分が大きく変わったという。3歳の男の子と打ち解けるための努力は自分と向き合

※ここに取り上げた団体はいずれも、趣旨に賛同する方の参加や、スタッフ、サポーターなどを募っています。  
関心のある方は、こちらのメールからご連絡してみてください。

Teach For Japan : info@teachforjapan.org わかりMATH : info@wakarimath.com  
スリール : info@sourire-heart.com セカンドチャンス! : secondchance234@gmail.com

うことにもつながり、内向きだった性格が積極的になった。数多くの社会人、家庭人との出会いも大きな刺激になった。

「子育てだけではなく、仕事も続けることで自分らしくいられ、だから子どもにも120%の愛情を注げる。そんなママさんたちが、キラキラと輝いて見えました。ああ、自分もこうなりたいなと心から思えました」(石川さん)

## 04

### 少年院経験者支援ネットワーク

セカンドチャンス!

欧米には元犯罪者が犯罪者の社会復帰を支援するために立ち上げた団体が数多くあり、その存在もオープンになっていて、当事者だからこそ有効な支援が可能だという考え方も根付いている。また、そういう団体のサポーターとしてスウェーデン国王といった公人や、H&Mなどの大企業が名を連ねることも珍しくない。犯罪を個人や家庭の責任にとどめるのは誤りであり、社会全体で責任を負わなければならないという意識が浸透しているのだ。

ここ日本では、犯罪の当事者が過去を明かすのが難しいような空気があるためか、これまでは当事者同士が知り合

#### 愛情たっぷりの学生を 子どもが待ち焦がれる

支援してもらう家庭にもメリットがある。学生は事前に子育てや家族とのコミュニケーションなどに関して入念な研修を受け、インターン期間も熱心にミーティングが行われる。そのように準備万端の学生が愛情たっぷりに、体力全開で子どもたちと接するので、子ども

い、助け合うことが少なかった。

そんななか「セカンドチャンス」というNPOが立ち上がり、11年より「少年院出院者による出院者に対する支援」を開始した。活動のひとつの柱は、少年院での講話だ。NPO副代表であり少年院出院者でもある才門辰史氏は、次のように説明する。

「出院後にどうやって仕事に就いたかといった自分の体験も話しますが、それよりもとにかく伝えたいのは、『君たちは一人じゃない、僕らはみんな仲間だ』ということなんです。出院して何か困ったら、いつでもセカンドチャンスに連絡してくれと言っています」

もがよるこばないわけではない。

「ベビーシッターさんをお願いしていたときは『ママは今度いつ出かけるの?』とお子さんが不安がついていたのが、インターンの学生が行くようになって『お姉ちゃんは今度いつ来るの?』と変わったと言ってくださるご家庭があります。子どももうれしいし、保育者(学生)からも感謝されるし、自分も学びの時間ができると言われる親御さんが多く、

#### 出院者の「居場所」をつくり 再犯を防止する

「孤独」は再犯を促すといわれる。少年院を出てたとえ仕事が決まっても、職場で過去のことは話づらい。周囲と距離ができて、「やっぱり自分をさらけ出せるのは昔の仲間しかいない…」と思ってしまうがち。暴力団や暴走族ならば、出院したら「おめでとう!」と迎えてくれる。真つ当な世界で、そうやって迎えてくれるところはほとんどない。出院して真つ当に生きている人と出会う機会も極めて少ないから、その先どう生きていけばいいかわからない。「だから出院したとき、そのことを手放しでよろこんでくれて、これから一緒に頑張ろうと言ってくれる人がいたらどれだけいいか。私もそういう集ま

とてもありがたいと思っています」(スリール株式会社社長堀江敦子氏)



学生はただ子どもと遊ぶのではなく、成長を促すように、社会性が身につくように接する。そのための研修も十分行う



セカンドチャンス!のメンバーが執筆した初の単行本(新科学出版社)。自らの体験と今後の抱負がつつられている